



冬にしみじみと味わうクラシック♪



『ショートショートドロップス 3. 舟歌』高野 史緒

(スタッフ・K)

音楽を読む

華々しいデビューから14年、落ちぶれたピアニストのヴィ君が挑むのは、最新AIのための演奏でした。そのAIの役割は、なんと「音楽を聴くこと」。博士は「音楽の在り方を根本から変える存在になる」と語り、半信半疑のヴィ君はショパン作《舟歌(バルカローレ)》を弾き始めます。ショパンが晩年の傑作とも名高いこの曲を作曲した頃、恋人ジョルジュとは破局寸前、持病も悪化し心身ともに疲弊していました。ジョルジュから聞いたヴェネツィアの思い出をもとに、理想の愛や失われたものへの憧れ、孤独を音楽に託したといわれます。諦めていたピアニストとしての自分を再び見出すヴィ君の姿は、ショパンが絶望の中で到達した美の極みに重なります。ゴンドラの旅のように音楽に身を委ねることで心が動き出す——その幻想的な瞬間を《バルカローレ》は映し出しています。ぜひこの曲を聴きながら本作をお楽しみください。

『ショートショートドロップス』
新井 素子/編出版社:キノブックス
請求記号:913.68/3
駅南図書館所蔵ありナクソスに
ログインして
アクセス!

「ショパン 舟歌」で検索するとショパンコンクールでのエリック・ルー(2025年優勝)の演奏を聴くことができます。新しいものから名盤まで色々聴き比べてみるのもナクソスの楽しみですね。

クラシックにふれよう

『雨だれ 24の前奏曲 第15番』フレデリック・ショパン

(スタッフ・O)



5年に一度のショパンコンクールが開催され、5年前に続き日本人が入賞したというニュースを耳にした方も多いのではないのでしょうか。ピアノ曲を数多く作曲したショパンの作品の中から『雨だれ 24の前奏曲 第15番』をご紹介します。よく知られている作品ですが、作品の生まれた環境を知るとまた深い味わいを感じることができるのではないのでしょうか。この曲が作曲されたのはショパンの病氣療養をかねてジョルジュ・サンドとその子どもたちとマヨルカ島に滞在していたときでした。環境的にも不自由であったり、療養の目的であったにもかかわらずあってショパンの病状は悪化するという状況の中、「24の前奏曲集」をはじめとする大曲をいくつか完成させました。この前奏曲はショパンが敬愛するバッハの平均律クラヴィア曲集にならって、全24の長・短調すべての調性を用いて書き上げたものです。著書の中でサンドが「屋根に落ちる雨だれの音の中、涙しながらこの曲を弾いていた」と伝えたことから「雨だれ」というタイトルで呼ばれているそうです。(諸説あり)

静かな雨音の表現から始まり、中間部では短調に転じ重苦しい雰囲気包まれますが、最後には元の調性に戻り静かに雨だれの音だけを残して終曲を迎えます。降りしきる雨に包まれるような美しく優しいメロディーと雨だれを思わせる音の響きが染み入る名曲です。

参考文献:『図説ショパン』伊熊よし子/著 河出書房新社 2010.2 駅南/762.3/3
『マヨルカの冬』ジョルジュ・サンド/著 小坂 裕子/訳 藤原書店 1997.2 中央/M955/3

ナクソスに
ログインして
アクセス!

ナクソスで、「ショパン 雨だれ」で検索すると465件もヒットします。それほど人気のある、また演奏者を惹きつける曲であると言えるでしょう。ショパン弾きと呼ばれるアルフレッド・コルトーやショパンコンクール優勝のラファウ・ブレハッチなどなどそれぞれの演奏を是非お楽しみください。



編集担当のひとこと

奇しくもショパン特集となった今回のえきなん音楽だよりはいかがでしたでしょうか。寒さも本格的になってきた今日この頃、クラシック音楽とともに温かく過ごしてはいかがでしょうか。ショパンも好んで楽譜を持ち歩き弾いていたというバッハの平均律クラヴィア曲集は個人的にもとても好きな作品です。聴くことはできませんがショパンの弾く平均律クラヴィア曲集はどんな感じだったのでしょうか、興味が惹かれますね。